

## ネガティブ気分維持に及ぼす自己評価感情の効果

西川純代\* 中條和光\* 鈴木伸一\*\*

The effect of self-esteem on the maintenance of negative mood

Sumiyo Nishikawa\* Kazumitu Chujo\* Shin-ichi Suzuki\*\*

Negative mood is associated with negative attentional bias. Recent research suggested that this attentional bias enhances the encoding of negative information, so negative mood is maintained. Furthermore, people who have high self-esteem may have high motivation to recover from negative mood. The purpose of this study was to investigate the effect of self-esteem on the maintenance of negative mood that induces by the mood induction method. Participants were thirty undergraduate students, who were divided into two groups (high self-esteem/low self-esteem). They were induced into a negative mood, and engaged in the dot-probe task and the memory task. Results of analyses on the dot-probe task revealed that participants showed negative attentional bias regardless of self-esteem. And results of analyses on the memory task and mood evaluation showed that participants maintained negative mood regardless of self-esteem. In all, these results suggest that negative mood is maintained regardless of self-esteem.

**Key words :** maintenance of negative mood, self-esteem, attentional bias, motivation

### 問題

不安患者や抑うつ患者は、客観的には脅威的ではない状況であっても不安な気分や抑うつな気分を維持してしまったり、悪いことばかりが目についてしまったりという認知的特徴を示すことが知られている(藤原・岩永, 2000)。

感情が認知に及ぼす影響のひとつに、注意バイアスと呼ばれる現象がある。これは例えば、不安な気分にある人が周囲の情報の中から脅威に関連した刺激に注意を向けやすいといったような、偏

---

\* 広島大学大学院教育学研究科 (Graduate School of Education, Hiroshima University)

\*\* 広島大学大学院教育学研究科附属心理臨床教育研究センター (Training and Research Center for Clinical Psychology, Graduate School of Education, Hiroshima University)

った注意が生じている状態である。この注意バイアスにより、特定の感情価を持つ刺激がその感情価と一致する気分の時に処理されやすいという気分一致効果が生じると考えられる。これまで注意バイアスのメカニズムは Bower (1981) の連合ネットワーク理論やスキーマ理論によって説明されてきた。連合ネットワーク理論では、記憶内に保持されている情報は相互の関連性を反映する形でネットワークを形成しており、その中に感情もネットワーク内のひとつのユニットとして表されると考える。そして、ある気分が生起すると、その気分と一致した情報に対するアクセシビリティが高まり、その結果注意バイアスのような選択的な情報処理が引き起こされると考えられている。一方、スキーマ理論では、不安患者や抑うつ患者に比較的安定した永続的でネガティブなセルフスキーマが存在し、そのスキーマがポジティブな情報を排除し、ネガティブな情報を選択的に処理するために注意のバイアスが生じると考えられている。これら二つのモデルは、情報の選択的な処理過程が、ネットワーク理論では気分喚起によるネットワーク活性により規定されると考えるが、スキーマ理論では個人の不安になりやすさにより規定されると考える点が異なっている。

Teasdale & Dent (1987) は、回復した抑うつ患者と健常者を中性的な気分と憂うつな気分誘導し、感情語がどの程度自分に当てはまるかを尋ねた。その結果、憂うつな気分状態でのみ健常者よりも抑うつ患者がネガティブ語の方が自分に当てはまると答えたと報告している。このことは、不安になりやすいという個人の特性よりも気分状態が注意バイアスと関係していることを示唆していると藤原・岩永 (2000) は考えている。Teasdale & Dent (1987) の結果からは Bower の連合ネットワーク理論による注意バイアスの説明が支持される。しかし、連合ネットワーク理論では不安によりネットワーク活性が生じることについては説明しているものの、不安が維持されることについて説明することは出来ない (藤原・岩永, 2000)。

不安の維持について藤原・岩永 (2000) は、注意バイアスによって脅威情報を入力しやすくなり脅威刺激にさらされつづける状態が作り出されているために、ネガティブ気分が維持されるのではないかという仮説をたて実験によって検討している。この実験では被験者をポジティブな気分またはネガティブな気分誘導し、dot-probe 課題によって注意バイアスの発生を確認した。また、気分評定を 4 回繰り返して被験者の気分の変化について調べた。その結果、被験者の気分をネガティブに誘導した条件においてネガティブな注意バイアスが生じ、ネガティブ気分が維持されたことが示されている。

ところで従来の気分一致効果研究には、実験的に誘導された被験者の気分が認知に及ぼす影響を扱っている研究が多い。このような手続きは個人差を剰余変数として統制するものであると言えよう。しかし、感情が認知過程に及ぼす影響を検討する際には、一時的な気分状態にくわえて、より安定した感情特性についても研究の中に盛り込まなければ、感情と認知の理論の検証や構築が十分に出来ない (伊藤, 2000) という指摘がある。例えば、Smith & Petty (1995) の実験では、自尊感情 (self-esteem) の高低が、気分一致効果に影響を及ぼすことが見出されている。この実験では、ネガティブな気分誘導された場合に、自尊感情の低い人は曖昧な手がかりに対してよりネガティブな文章を書き、自尊感情の高い人はよりポジティブな文書を書いたことが報告されている。また、伊藤 (2001) は、自己に対する肯定的感情を自己評価感情と呼び、自己評価感情が高い人は

低い人に比べて、ネガティブな感情を誘導されたときにネガティブな特性概念の活性化を人物の印象評定に利用しにくいのではないかという仮説を検討している。この実験は、喚起する感情（ポジティブ／ネガティブ）×感情の起因性（自己／他者）×自己評価感情（高／低）×認知課題（単語連想／印象形成）の四要因計画であった。喚起する感情と自己評価感情は被験者間要因、感情の起因性と認知課題は被験者内要因であった。伊藤（2001）は、印象形成課題のような対人認知場面における評価において、感情を制御しようとする動機付け等の要因が関与し、感情の影響が調整されると考えていた。具体的には、生じたネガティブな感情を低減緩和しようとするといった動機付けが働きやすい自己起因によるのか、働きにくい他者起因によるのかによって、感情調整の働きが異なると考えた。さらに、このような感情と起因性の影響は、感情を制御しようとする動機付けが働きやすいか否かという自己評価感情の高低に依存する可能性を考えた。この実験の結果によると、感情の起因性に関わらず、単語連想課題においてはポジティブ気分でもネガティブ気分でも気分一致効果が示されている。また、北村（1991）の5特性尺度を用いた印象形成課題において、ひとつの尺度（理知性）では自己評価感情高群でのみネガティブな感情の効果が感情の起因性に依存していた。具体的には、同じニュートラルな文章を読んでも、自己起因のネガティブ感情を誘導された場合はよりポジティブな印象を形成し、他者起因のネガティブ感情を誘導された場合はよりネガティブな印象を形成した。ここから、自己評価感情の高い人と低い人ではネガティブな気分により活性化された概念に対する注意の仕方が異なる可能性が示唆されている。

これらの研究と同様に、自尊感情の高い人と低い人では、同じようにネガティブな気分を誘導されても異なった行動を取ることが多くの研究によって指摘されている。Taylor & Brown（1988）によると、自尊感情の低い人は、高い人に比べて以下のような傾向があることが指摘されている。

(a) 自己に関連したポジティブな情報とネガティブな情報を同じ頻度で再生する、(b) 結果に対する責任の帰属に対して非常に公平である、(c) 自己評価と他者評価が非常に一致する、(d) 自己評価が客観的な他者による評価とより一致するように示される。また、Smith & Petty（1995）は、自尊感情の高い人は誘導されたネガティブな感情から回復しようとする動機付けが高く、ポジティブな情報を検索したために気分一致効果を示さず、このような行動の差異が生じると解釈した。以上のように、自尊感情の高低によって、誘導されたネガティブな感情から回復しようとする動機付けが異なるのであれば、注意バイアスが気分維持に及ぼす効果にも自尊感情の高低が影響を与えることが考えられる。本研究では、池上（1993）が作成した自己評価感情尺度を用い、ネガティブな気分誘導によって生じた注意バイアスが気分維持に及ぼす効果に対して、自己評価感情の高低が与える影響を検討することを目的とする。

本研究で検討しようとする仮説は以下のとおりである。

- ・ 自己評価感情が高い人はネガティブな気分を誘導された際にネガティブな気分から回復しようとする動機付けが高いため、積極的にポジティブな情報を検索し、その結果ネガティブ気分は維持されない。
- ・ 自己評価感情が低い人は、ネガティブな感情を誘導されると、回復の動機付けが低いためネガティブな情報に対して生じた注意バイアスが解消されず、ネガティブ気分が維持される。

## 方法

### 1. スクリーニングのための予備調査

**調査対象者** 大学生 214 名 (男性 76 名, 女性 135 名, 不明 3 名; 19~27 歳, 平均年齢 20.8 歳,  $SD = 1.1$ ) を調査対象者とした。回収率, 有効回答率は 100% であった。

**調査材料** 自己評価感情尺度: 池上 (1993) が既存の尺度から再構成して作成したものをを用いた。池上 (1993) は, Rosenberg (1965) の自尊心尺度の 10 項目, Y-G 検査の下位尺度である I 尺度 (劣等感の強さ) と D 尺度 (抑鬱傾向) の各 10 項目, 計 30 項目を自己評価感情尺度の予備項目として用意した。そして, 被験者 239 名にこれら 30 項目についてどのくらい日頃の自分に当てはまるかを 7 段階で評定させた。得られた結果をもとに主成分分析を行い, 第 1 主成分の負荷量が 0.4 以上あった 20 項目を自己評価感情尺度として用いた。本実験では, 調査対象者にこれらの 20 項目についてどのくらい日頃の自分にあてはまるかを 7 段階 (1 点: 全くあてはまらない~7 点: 非常にあてはまる) で評定させた。自己評価感情得点は, 全項目得点を合計したものであり, 最低点は 20 点, 最高点は 140 点である。尺度項目の一覧を Table 1 に示した。

Table 1 自己評価感情尺度

- 
1. 私は少なくとも他の人と同じ程度にはうまくできる
  - \* 2. 自分を失敗者と感じることが多い
  - \* 3. 私には自慢できるものがほとんどない
  4. 自分に大体満足している
  - \* 5. 自分をもっと尊敬できたらと思う
  - \* 6. 自分が役立たずな人間だと感じる 때가時々ある
  - \* 7. 自分はだめな人間だと思ふ 때가時々ある
  - \* 8. 失敗しやすいかといつも心配である
  - \* 9. 人から邪魔にされはしないかと心配である
  - \* 10. 人前で顔が赤くなるので困ることが多い
  - \* 11. 劣等感に悩まされる
  - \* 12. すぐうろたえるたちである
  - \* 13. 困難にぶつかると気がくじける
  - \* 14. 何かにつけて自信がない
  15. あまり迷わず決心がつく
  - \* 16. 人中にいてもふと寂しくなることがある
  - \* 17. 時々自分をつまらぬ人間だと思ふことがある
  - \* 18. たびたび過去の失敗をくよくよと考える
  - \* 19. たびたびゆううつになる
  - \* 20. たびたび元気がなくなる
- 

\*は逆転項目

**結果** 調査対象者 214 名の自己評価感情得点の平均値は 81.39 点、SD は 19.20 であった。このため、自己評価感情得点が 82 点以上であった 107 名（男性 43 名、女性 63 名、不明 1 名）を自己評価感情得点高群、自己評価感情得点が 81 点以下であった 107 名（男性 33 名、女性 72 名、不明 2 名）を自己評価感情得点低群とした。

## 2. 実験

**被験者** 予備調査の調査対象者のうち、実験に協力することに同意した 44 名（男性 15 名、女性 29 名）を被験者とした。このうち自己評価感情得点高群は 22 名（男性 12 名、女性 10 名）、自己評価感情得点低群は 22 名（男性 3 名、女性 19 名）であった。気分誘導の後、気分に変化の無かった被験者 13 名（自己評価感情高群 6 名、自己評価感情低群 7 名）は分析対象から除外した。また、内省報告で、記憶課題において意図的にポジティブバイアスを生じさせていたと報告した被験者 1 名（自己評価感情高群）も分析対象から除外した。最終的に両群ともに 15 名（自己評価感情高群：男性 9 名、女性 6 名；自己評価感情低群：男性 2 名、女性 13 名）を分析対象者とした。

**実験計画** 自己評価感情得点（高／低）と、課題における刺激語の組み合わせの種類（快適語 例：笑顔、快適／脅威語 例：戦争、死刑）の二要因計画とした。前者は被験者間計画とし、後者は被験者内計画とした。

**気分誘導法** 藤原・岩永（2000）の実験を参考に気分誘導を行った。被験者の気分をネガティブに操作する為に、Velten 誘導法と音楽気分誘導法を用いた。

Velten 誘導法は Teasdale and Russell（1983）によって修正を加えられたものを使用した。『私は不幸である』などの不安や憂うつな気分になるような文章（12 個）を用いた。実験で用いた文章の一覧を Table 2 に示した。これらの文章は CRT 上に二文一組で呈示した。一組の呈示時間は 20 秒であった。呈示された文章を読み上げた音声の流れした後、被験者に文章を音読させることによって、気分誘導を行った。

音楽誘導法ではネガティブな気分を誘導する音楽としてベートーベンの交響曲第 3 番より“第二楽章”、シベリウスの“トユオネラの白鳥”を使用した。これらの音楽は藤原・岩永（2000）の予備実験において、もっともネガティブ気分を喚起したものであった。それぞれの曲の冒頭部分から 4 分ずつ、合計 8 分間音楽を聴かせた。被験者は音楽をよく聴いて、音楽が表す気分を自分のものとして感じるように教示された。

Table 2 Velten 誘導文

本当にうんざりで、もう何もしたくない	将来に希望が持てない
今、私はブルーな気分である	自分がみじめに見えてしょうがない
何をしても駄目だと思うので何もする気が起こらない	すべてのことにうんざりしている
疲れ果てて、精も根も尽き果てた	体がだるくて動く気がしない
私はなんて魅力がないんだろう	何をやっても無駄な気がする
すべてが無駄に見え、何をしてもしょうがないと思う	私は不幸である

気分評定 多面的感情尺度(寺崎, 古賀, 岸本, 1992)を利用して藤原・岩永(2000)が作成した尺度を使用した。この尺度は、抑うつ・不安を表す5項目(もの悲しい・不安な気分である・くよくよした・憂鬱な気分である・無気力な)、活動的快を表す5項目(元気な・活気のある・気分がよい・うきうきした・充実している)からなる10項目で構成されていた。被験者に、評定時点においてこれらの気分状態をどの程度感じているかを7段階(1点:全くそうではない~7点:全くそうである)で評定させた。同時に、眠い、集中しているという2項目についても7段階(1点:全くそうではない~7点:全くそうである)で評定させた。

#### 課題呈示方法

記憶課題:気分一致効果がみられるかどうかを検討するため、記憶課題を行った。記銘リストとして快適語、脅威語を各4個ずつ含む単語リストを3組作成した。この単語リストを1組ずつ順番に呈示し、これを3回繰り返した。1組の単語リストの呈示時間は8秒とし、呈示時間間隔は2秒とした。

dot-probe 課題:注意バイアスの発生を確認するための手続きとして、藤原・岩永(2000)が MacLeod, Mathews & Tata (1986)などを参考に行った dot-probe 課題を用いた。この課題では、感情語(快適語、または脅威語)と中性語の組み合わせを呈示し、その後単語のあった場所のどちらかにドット(●)を呈示する。被験者は呈示されたドットに対して出来るだけ速くかつ正確に反応するように求められる。このとき不安な気分にある人は、そうではない気分の人に比べ、脅威語の後に呈示されたドットに対してより速く反応するため、脅威語に対する注意バイアスを生じさせたと判断される。

本実験の dot-probe 課題は10個の練習試行と104個の本試行からなっており、どちらも同様の方法で行った。本試行の組み合わせは26個の脅威語と中性語との組み合わせと26個の快適語と中性語との組み合わせをそれぞれ2回ずつ使い、合計104試行となった。まず画面中央に凝視点(+)を2秒間呈示し、被験者はそこに視点を置くように教示された。CRT上の凝視点が消えた直後に、感情語と中性語との組み合わせである単語対を呈示した。感情語、中性語が左右どちらに呈示されるかはランダムにした。刺激呈示時間は500msとした。単語刺激の呈示終了直後、ドットを単語のあった場所のどちらかに呈示した。被験者はCRT上のドットが右の単語の後にいたら右のキーを、左の単語の後にいたら左のキーを、出来るだけ速くかつ正確に押すように教示された。

記憶課題および dot-probe 課題では、藤原・岩永(2000)の実験で用いられた刺激を使用した。これらの単語は、単語の感情価とその単語をどの程度知っているかを大学生に評定させて統制したものであった。

実験室及び装置 実験は、約2.1m×1.7mの実験室で行った。被験者は、刺激呈示用のモニターから約80cm離れた椅子に座った。教示、Velten誘導法の文章呈示、記憶課題及び dot-probe 課題の刺激呈示、反応内容、反応時間の測定は、E-Primeとパーソナルコンピュータ(intel Celeron 1700MHz搭載)を用いて行った。Velten誘導法の音声及び気分誘導のための音楽は、ミニディスクを用いて実験室内のスピーカーから呈示した。

手続き 被験者が実験室に入室後、『本実験は、そのときの気分と単語の認知の関係を調べる実

験です』と教示し、dot-probe 課題の練習試行を 10 試行行った。このときの教示は、『画面の中央に十字が呈示されるので、それに視点を置いてください。十字が消えた後、右と左にひとつずつ単語が呈示されます。その後単語が消え、単語のあった場所のどちらか一方に丸が呈示されます。右の単語の後に丸が出てきた場合は右のボタンを、左の単語の後に丸が出てきた場合は左のボタンを、二つのボタンのうちどちらか一方を出来るだけ速く、正確に押してください』というものであった。被験者が課題のやり方を理解したかどうかを確認した後、実験を開始した。実験開始以降の教示は全て CRT 上に呈示した。まずベース時の気分を気分評定表を用いて記入させた。その後 Velten 誘導法を約 3 分、音楽誘導法を 8 分間という順序で気分誘導を行った。Velten 誘導法の教示は、『これからいくつかの文章が画面に呈示され、それを読み上げた音声流れます。その後、自分でもう一度声に出して文章を読んでください。その際、文章が表す気分を自分のものとして感じ、その気分集中するように心がけてください』というものであった。音楽誘導法の教示は、『これから音楽が 8 分間流れます。よく聴いてください。その際、音楽が表す気分を自分のものとして感じ、その気分集中するように心がけてください』というものであった。気分誘導後に気分評定を行った。その後、記憶課題を約 2 分間行い、気分評定を行った。記憶課題の教示は、『これから 24 個の単語を覚えてもらいます。単語は 8 個ずつ 3 回に分けて出てきます。全ての単語は 3 回繰り返して出てくるので、出来るだけ多くの単語を覚えてください』というものであった。続いて dot-probe 課題を約 8 分間行い、気分評定を行った。dot-probe 課題では、『画面の中央に十字が呈示されるので、それに視点を置いてください。十字が消えた後、一組の単語対が呈示され、その後単語のあった場所のどちらか一方に丸が呈示されるので、この丸がある場所に対し、二つのボタンのどちらか一方を出来るだけ速く、正確に押してください』と教示した。最後に記憶課題の自由再生を 5 分間行った。記憶課題の再生時の教示は、『記憶課題で覚えた単語を出来るだけたくさん書いてください。単語を書く順序は呈示された順序と違って構いません。再生時間は 5 分間です』であった。実験に要した時間は約 30 分であった。実験終了後、ディブリーフィングを実験室とは別室で行い、その後で内省報告をとった。

従属変数 藤原・岩永 (2000) を参考に 3 つの従属変数を設定した。

①dot-probe 課題における反応時間から、注意バイアス得点を求めた。注意バイアス得点は次式によって算出した。

$$C=A-B$$

A：中性語（脅威語と対呈示される中性語、快適語と対呈示される中性語）の後に呈示されたドットに対する反応時間

B：感情語（脅威語、快適語）の後に呈示されたドットに対する反応時間

C：注意バイアス得点

快適語と対呈示される中性語の後に呈示されたドットに対する反応時間から快適語の後に呈示されたドットに対する反応時間を引くことによって求められる注意バイアス得点を快適語得点とし、脅威語と対呈示される中性語の後に呈示されたドットに対する反応時間から脅威語の後に呈示されたドットに対する反応時間を引くことによって求められる注意バイアス得点を脅威語得点とした。

両得点が0以上であることは、それぞれの感情語に対して注意バイアスが生じていることを表し、0以下であることは、感情語と対呈示される中性語に対して注意バイアスが生じていることを表す。

②気分評定によって得られたデータは、不安・不快項目を反転させ、全項目の得点の平均を求め、これを気分得点とした。よって、得点が高いほどポジティブな気分であることを表し、逆に得点が低いほどネガティブな気分であることを表す。実験開始後すぐの気分得点をベース、気分誘導後の気分得点をT1、記憶課題後の気分得点をT2、dot-probe課題後の気分得点をT3とする。

③自由再生によって再生された単語をそれぞれ快適語、脅威語に分類し、それぞれの平均再生数を求めた。このとき、記憶課題で呈示された単語が再生されたときのみを正答としてカウントした。誤字（娯楽を誤楽、無惨を無残など、あきらかに誤字であると思われるもの）、仮名書きのものも正答としてカウントした。

分析方法 気分得点の時系列変化、注意バイアス得点、再生課題における平均再生数は全て分散分析を用いて分析を行った。下位検定には、Ryan法を用いた。

## 結果

気分状態の推移 Velten誘導法と音楽誘導法によって誘導された気分の検討を行った。両条件におけるベースからT3への気分得点の時系列的変化をFig.1に示した。両条件における気分状態の変化を自己評価感情（高/低）×時系列（ベース、T1、T2、T3）の二要因の分散分析によって検討した結果、自己評価感情の主効果 [ $F(1,29) = 7.01, p < .05$ ] が認められた。このことによつて、自己評価感情高群の気分状態が、自己評価感情低群より有意にポジティブであったことがわかった。また、時系列の主効果 [ $F(3,87) = 44.49, p < .001$ ] が認められた。下位検定の結果、両条件において、T1、T2、T3の気分得点が、ベース時の気分得点よりも有意にネガティブであった。このことから、両条件において、誘導されたネガティブな気分が dot-probe 課題後まで維持されていることがわかった。交互作用は認められなかった。

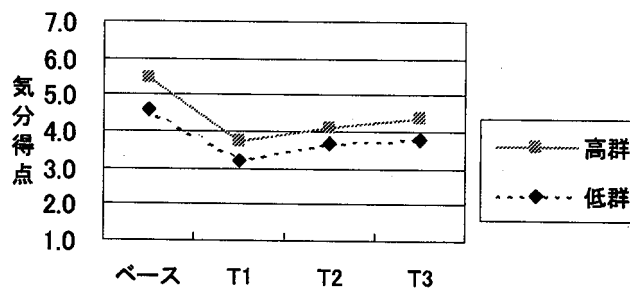


Fig.1 気分状態の推移



**注意バイアス得点の比較** 自己評価感情高群，低群それぞれの注意バイアス得点を Fig.2 に示した。両条件の注意バイアス得点を自己評価感情（高/低）×注意バイアス得点（快適語得点/脅威語得点）の二要因の分散分析によって比較した結果，注意バイアス得点の主効果が有意傾向であった [ $F(1,28) = 4.14, p = .052$ ]。このことから，両条件において，快適語得点より脅威語得点の方が高い傾向にあることがわかった。

**快適語，脅威語の平均総再生数** 両条件において再生された記憶課題の刺激を快適語，脅威語に分類した。それぞれの平均総再生数を Fig.3 に示した。自己評価感情（高/低）×刺激語の種類（快適語/脅威語）の二要因の分散分析を行った結果，刺激語の種類の主効果が認められた [ $F(1,28) = 18.53, p < .001$ ]。このことから，全体的に快適語よりも脅威語の方が有意に多く再生されたことがわかった。

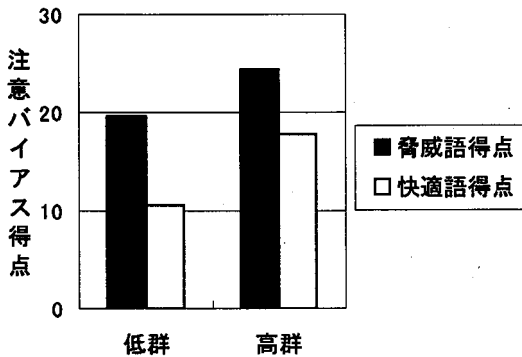


Fig.2 注意バイアス得点

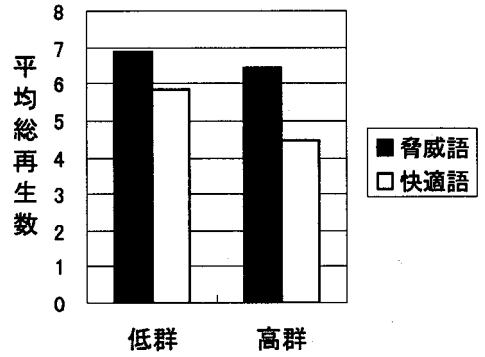


Fig.3 平均総再生数

## 考 察

本研究の目的は，ネガティブな気分誘導によって生じた注意バイアスが気分維持に及ぼす効果に対して，自己評価感情の高低が与える影響を検討することであった。気分状態の推移については，藤原・岩永（2000）の結果とほぼ同様の結果が得られ，自己評価感情の高低に関わらず，本実験の気分誘導の手続きは有効であったと思われる。

注意バイアス得点や記憶課題の再生数について検討したところ，自己評価感情による有意な差は見られなかった。すなわち自己評価感情の高低に関わらず被験者にはネガティブな注意バイアスが生じ，ネガティブな気分が維持されていた。このことから，自己評価感情が低い人に関する仮説は支持されたが，「自己評価感情が高い人はネガティブな気分を誘導された際にネガティブな気分から回復しようとするため，積極的にポジティブな情報を検索し，その結果ネガティブな気分は維持されない」とした仮説は支持されなかった。本研究において仮説が支持されなかった理由としては，次のような点が考えられる。

第一点目は，伊藤（2001）の実験においては，気分評定が気分操作課題の後でのみ行われている

ため、気分操作以前の被験者の気分状態は考慮されていないという問題点があると考えられる。また、自己評価感情の高低によって気分状態が異なるかどうかについても考慮されていない。本研究の結果によると、自己評価感情の高低によって気分状態は有意に異なっていた。具体的には、自己評価感情が高い人は低い人に比べて、時系列のどの時点においてもよりポジティブな気分であった。このことから考えると、伊藤（2001）の実験において自己評価感情の高低によって異なる結果が得られたのは、ネガティブな気分によって活性化したネガティブな概念の利用の仕方が異なるためではなく、自己評価感情によってベースとなる気分状態が異なったためである可能性があると考えられる。

第二点目は、刺激として用いた脅威語に関するものである。自己評価感情は、自己をどの程度肯定的に捉えているかを測定するものであった。しかし、本研究で用いた刺激は、自己や自尊心に関するものではなかった。このため、注意バイアスや気分一致効果が自己評価感情に関わらず同じように見られたのではないだろうか。今後、実験に用いる刺激を再検討する必要がある。脅威語を自己に関するものにすれば、自己評価感情の低い被験者がより強いネガティブな注意バイアスを発生させる可能性があると考えられる。

第三点目として、刺激の呈示時間に問題があった可能性があると考えられる。本研究の仮説は、自己評価感情の高い人はネガティブな気分誘導された際に積極的にポジティブな刺激を検索するのではないかというものであった。しかし、dot-probe 課題の刺激呈示時間は 500 ms であり、意図的に刺激を検索するには短過ぎた可能性がある。そのため、自己評価感情の高低に関わらず自動的な注意バイアスが発生したと考えられる。また、記憶課題の刺激呈示時間は 8 秒間であり、被験者の内省報告によると、記銘方略を用いようとしたが呈示時間が短かったために用いることが出来なかったと報告した被験者が複数いた。以上のことから、記憶課題においても dot-probe 課題においても、刺激の呈示時間を検討する必要があると考えられる。刺激の呈示時間をさらに長くすることにより、被験者の意図的な情報検索が行われるため、自己評価感情の高低によって異なった結果が得られる可能性がある。

第四点目として、ネガティブ気分からの回復の動機付けの高低と、実際のコーピングが対応していないために、自己評価感情の高低に関わらず気分の回復過程が同じであった可能性があると考えられる。ネガティブ気分から回復しようとするコーピングを行う群と行わない群に被験者を分けた研究を行うことで、気分の回復過程が異なるという結果が得られるかもしれない。

また、本研究では自己評価感情得点の高群と低群の間で男女比が異なっていた。このため性差が交絡要因となっていた可能性がある。

今後、以上に述べた問題点を検討・解決し、気分維持に及ぼす自己評価感情の影響について更に検討していくことが必要であると考えられる。

## 引用文献

Bower, G. H. 1981 Mood and Memory. *American Psychologist*, 36, 129-148.

藤原裕弥・岩永 誠 2000 注意バイアスが気分維持に及ぼす効果 感情心理学研究, 7, 1-12.

- 池上知子 1993 自己感情と他者感情が対人認知過程に及ぼす影響 愛知教育大学研究報告, 42 (教育科学編), 95-110.
- 伊藤美加 2000 気分一致効果を巡る諸問題 -気分状態と感情特性- 心理学評論, 43, 368-386.
- 伊藤美加 2001 自己や他者に対して生起した感情が単語連動課題および印象形成課題に及ぼす影響 感情心理学研究, 7, 91-102.
- 北村英哉 1991 特性概念の可得性と自己スキーマが対人記憶に及ぼす効果 心理学研究, 62, 221-228.
- MacLeod, C., Mathews, A. & Tata, P. 1986 Attention bias in emotional disorders. *Journal of Abnormal Psychology*, 95, 15-20.
- Smith, S. M., & Petty, R. E. 1995 Personality moderators of mood congruency effect on cognition : The role of self-esteem and negative mood regulation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 1092 - 1107.
- Taylor, S. E. & Brown, J. D. 1988 Illusion and well-being : A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, 103, 193-210.
- Teasdale, J. D., & Russell, M. L. 1983 Differential effect of induced mood on the recall of positive, negative, and neutral words. *British Journal of Clinical Psychology*, 22, 163-171.